

日本産業衛生学会東海地方会

## 地方会ニュース

発行所 地方会ニュース編集事務局

〒 470-1192

愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98

藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学教

室内 電話 (0562) 93-2453

FAX (0562) 93-3079

発行責任者 竹内康浩・島 正吾

(題字 皿井 進筆)



北里研究所本館・医学館 [博物館明治村展示建物]

ドイツバロック風をベースに新時代の様式を加味、建物のベティメント(妻飾り)が特徴  
ここに働く人々も私達の対象職場です。

## 産業看護に思うこと



産業看護に携わって早や40年近くになろうとしてます。卒業してどの道へ進もうかと迷っていたのがまだ昨日のように思い出されます。今回巻頭言への看護職の登場は初めてのこと、丁度それと同様に新制度の保助看法制定後における産業看護の草分け時代を過ごして参りました。もちろん過去に多く

の諸先輩の軌跡を辿りながら、最近ようやく少し行く手に明るい光が見えてきたような気が致します。

諸外国の看護職の社会的評価の位置づけに比較し、日本の看護の歴史的背景をみるにつけ、諸外国のそれとは異なり、紆余曲折を身分の確立された位置づけを築き上げることには、非常に多くの苦勞を伴い、長い年月を要しました。

昭和47年労働安全衛生法成立時に、どれだけ多くの先輩諸姉の努力にもかかわらず、通達に終わってしまって落胆したことが鮮明に記憶に残っています。

今回初めて法の中に保健婦の名称が載った時の喜びは過去の経緯を知る者にとっては、何者にも喩えようのないものであり、非常に長い道のりでした。

和田 晴美 (名古屋鉄道)

さて、時代は変わっても産業看護とは、目、鼻、耳、足、口、五感を駆使し、産業現場に密着し、働く人々と働く環境のすべてを熟知して、ケアマネージメントが出来てこそ、初めて真の活動と言えるのではないのでしょうか。

これ等を踏まえ、自信をもって出来る後輩たちがどんどん育ってくださることを、望む次第です。

一方、念願の四年制大学の看護教育も次第に充実し、知識・理論も立派に確立されてきたことはうれしいことの一つですが、忘れてならないことは、つねに産業現場に密着しているものであってほしいことで、やたらと頭でかちにならないことが大切です。

また、産業看護職は産業保健チームの一員であることを忘れず、決して一人で独走せず、チームの中の他職種との連携プレイを如何にスマートに出来るかにより、その業務の評価が変わってくるということでも過言ではない、まさしくコーディネーター役であります。

また、今後の産業看護の方向として高齢社会のライフサイクルに合った、トータルな保健医療体制の中で担う部分を明確化する事と必ず労働者として受け入れられる学校保健・定年後お世話になる地域保健への連携プレイと社会福祉をも考慮に入れたシステムを如何に充実して行くかが課題ではないのでしょうか。

## 特集

## 平成10年度 東海地方会研修会



## はじめに

今年の研修会は愛知県の担当で、6月19日(金)久しぶりに名古屋大学で開催いたしました。愛知県産業医懇談会の幹事の先生方ならびに衛生管理業務女子研究会の方を中心に企画運営をお願いして、3名の各界トップレベルの講師からそれぞれ最新の話をお伺いすることができ、中身の濃い研修会になったと思っております。

懇親会も会場鶴友会館1Fのレストランで32名参加していただき、会員の親睦を図ることができました。

(企画運営委員代表 岩井 淳)

## プログラム

講演 I 「労働負担とストレス」 愛知医科大学教授 小林章雄  
座長 井谷 徹(名古屋市立大学医学部)

東海地方会総会

特別講演 「産業保健と社会福祉」

日本福祉大学教授 牧野忠康

座長 竹内康浩(名古屋大学医学部)

講演 II 「職域健康診断の今後のあり方について」

産業医科大学教授 大久保利晃

座長 吉田 勉(藤田保健衛生大学医学部)

懇親会(鶴友会館一階レストラン)

## 出席者の状況

	医 師	保健婦	看護婦	その他	合 計
愛知県	24 (23)	15 (10)	3 (2)	11 (5)	53 (40)
岐阜県	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	2 (2)
三重県	3 (3)	1 (0)	0 (0)	1 (1)	5 (4)
静岡県	4 (3)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	9 (8)
その他	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (0)	3 (1)
合 計	32 (30)	19 (13)	7 (6)	14 (6)	72 (55)

単位：人数、( )内は会員数

## 「労働負担とストレス」

小林 章 雄 (愛知医大衛生)



## 1. メンタルワークロードと職業性ストレス

精神的作業負担、メンタルワークロード、職場ストレスについて、一方では人間工学的な側面からメンタルワークロードの概念のもとでのアプローチ、また一方では職場ストレスモデルに基づく検討が進んでいる。人間工学的な面では、国際規格 ISO 10075 (1991)、JISZ 8502 (1994)、ISO 10075-02 (1996) などが規格化されている。ストレス研究の側からは、demand/control/support モデルやNIOSH職業性ストレスモデルなどの理論モデルに基づく評価とその信頼性・妥当性の検討、疾病リスクや抑うつ症状、欠勤、離職などのストレス反応との関連性の検討、国際的比較や蓄積的影響の評価などについての検討が試みられている。いずれの側からのアプローチも、概念や用語をよりクリアーに厳密性を増し、対策に結びつけようとする方向にある。

## 2. 労働負担とストレス

自動車メーカー従事者についての国際比較研究、長時間労働のモデルとしてのタクシードライバーの血圧と自立神経機能に関する研究、未婚・既婚看護婦の深夜前の休息の増加とその効果に関する研究、職場ストレスと生活習慣・THPとの関連についての研究、休養プログラムとその効果に関する研究、行動パターンと生理学的反応性に関する研究などを紹介した。これらの結果より、働きすぎや長時間労働など、生活全体の構造に関連して身体不活発などが生じていること、これらが交感神経活動の亢進や副交感神経活動の抑制

をもたらしていること、深夜勤務は逆位相にあるサーカディアンリズムの影響を受けること、勤務前の休息の増加等がそれらの影響を緩和、しかし女性の家庭役割などが休息の効果を弱めること、ストレスは、直接あるいは抑うつを介して身体不活発に関連すること。また、ストレスは生活習慣の改善にとっての抵抗力となり得ること、個人的な心理的なプログラムや喫煙なども一部はbiologicalなメカニズムを介して影響を及ぼすことなどを指摘した。

## 3. 職場での対策

職場での対策がうまくいった事例として、イタリアの航空管制官への対策、スウェーデンの製造業における対策、イギリスの製菓業におけるストレス対策などを紹介した。また、わが国の今後の職場の健康づくり、ストレス対策の方向性として、従来からの個人の生活習慣や個人の側からのアプローチばかりでなく、労働時間や作業方法の改善、職務負担の見直し、家庭役割などに配慮した全体的かつ環境調整的な職場対策を通じて対応する必要があることを述べた。

## 「産業保健と社会福祉」を聴いて

松 浦 正 江 (名古屋鉄道)

本格的な高齢社会を迎え、社会福祉のあり方が大きく変わろうとしています。

そこで、社会福祉の移り変わりおよび産業保健と社会福祉の連携について日本福祉大学教授・牧野忠康先生にご講演いただきました。



まず最初に、社会保障の構造改革として昭和35年国民皆保険制度ができ、すべての国民が健康で文化的な最低限度の生活保障が確保されるようになりました。

しかし、少子化と人口の高齢化という社会的影響を受け年金保険と医療保険財政の破綻をまねく結果となりました。そこで、昭和57年老人保健法ができ医療費抑制政策の強化が図られました。しかし、年々増え続ける医療費などの高騰により、来る2005年にピークを迎える高齢社会に向けて平成12年から介護保険制度が実施されること

となりました。また、保健・医療・福祉の統合化がなされこれを支えるためのケアマネージャーが現在 5 万人養成され今後ますます需要が高まるといわれました。もう一方では厚生省が提唱している少子化への対応としての「エンゼルプラン」、障害者基本法による「障害者プラン」、高齢化社会対策基本法としての「ゴールドプラン」が産業保健ともっとも密接な関係になります。

産業保健と社会福祉の連携を考えたとき、健康者と障害者がともに働ける職場の確保、働く女性のための子育て及び介護支援の充実、ライフステージに応じた自己実現のためのサポートシステムの確立が必要であることを強調されました。

以上のことから、産業保健と地域保健を包括的に考えていく社会福祉が重要であると思いました。



(牧野 忠康先生)

「職域健康診断の今後のあり方について」を聴いて



吉田 勉 (藤田保衛大医公衛)

産業医科大学(環境疫学研究室)教授の大久保利晃先生は、産業保健の今後のあり方について様々な場面で積極的に発言されるとともに、そのひとつの実践として21世紀を担う産業医の育成にも多大なご貢献をされてきた。その先生

から、現在の定期健康診断の問題点や、これからのあり方について、「職域健康診断の今後のあり方」と題して直接お話を伺う機会をもつことができた。

先生は、昭和63年の労働安全衛生法の改正に伴い、「成人病」対策に健康診断の重点がおかれるとともに、健康増進をも推進するために検診項目が増加した。しかし、それにより定期健康診断の有見率が上昇し、またいわゆる過労死が社会問題化する中で、平成 8

年10月に労働安全衛生法の一部改正により、健康診断の充実が諮られた経緯を述べられた。さらに、中央労働基準審議会から、「脳・心臓疾患等に対応した効果的な健康診断のあり方」が提言されたことをうけ、健康診断項目に関する検討会が現行項目に加えて、HD L-コレステロール、血糖の2項目を追加することなどを中心にした答申を出した。この答申の特徴は、単に項目の追加のみではなく、問診の充実や総合的かつ継続的な健康管理の重要性を指摘するとともに、産業医等の判断で省略可能な項目の検討など、健康そのものの根本的な考え方が議論されたことが強調された。

また、今後の健康診断導入にあたって必要な条件として ①優先度、②ニーズ、③疾病自然史、④事後措置体制、⑤実施体制、⑥評価、⑦検査の信頼性の有効性などを検討する必要があると述べられた。一方、検診項目の基準値について、臨床的な正常値を単純に当てはめることの問題点も指摘された。そして、これからの時代に備えて、経年的管理の徹底、電子カード化への対応、さらには長時間労働者に対する総合的健康管理の必要性についても言及された。

景気の停滞や労働基準法の改正による労働時間の短縮と「弾力化」が進む中で、効率的かつ弾力的で、より有効な健康管理を実施していくために、産業医の責務はますます重要になってきていることを、改めて実感させられた。



(大久保 利晃先生)



(懇親会風景)

日本産業衛生学会役員改選のお知らせ

本年度は学会役員選挙の年です。平成 9 年度より正会員であり、7月31日までに、本年度までの本部会費を納入された方に選挙権および被選挙権があります。なお、選挙日程の予定は下記の通りであります。また選挙権をお持ちの方は、全員投票にご協力くださいますようお願い申し上げます。

選挙日程予定

- 7月31日 選挙権・被選挙権取得最終日
- 8月15日 中央選挙管理委員会より会員名簿の送付  
本部理事・本部評議員の定数決定
- 9月8日 地方会選挙管理委員会設置(地方会選挙による)

- 9月10日 本部理事・本部評議員・地方会長の選挙投票用紙の送付
- 9月27日 投票締切
- 9月30日 開票
- 10月5日 までに選挙結果を本部へ報告
- 11月10日 理事長及び副理事長、監事候補者の推薦受付の締切
- 12月10日 までに投票用紙及び選挙広報(候補者氏名、経歴等)の発送
- 12月22日 投票締切
- 平成11年1月6日 開票

## 報 告

## 産業医学基本講座を受講して

今枝 敏彦 (名大医学研究科 環境労働衛生学教室)



平成10年度産業医学基本講座を受講しましたので、産業医科大学における産業基本講座がどのようなものか述べようと思います。本講座は昭和59年に発足し今年で15回を迎えました。本来は産業医科大学の卒業生を対象に開かれたようですが、他校卒業の医師、歯科医師にも門戸を開放しています。周知のように

労働安全衛生法の改正に伴い、平成8年度から産業医として法律上の認定を受けるためには、日本医師会認定の産業医研修に参加し50単位取得するか、あるいは産業医大で開かれる基本講座で200単位を取る事が必要になりました。4月から6月上旬の2カ月半の集中講義ですが最新の情報と即戦力になる実習は他では得難いものです。講座期間中は、今年を受講生の数が多いせいか、座席指定で出席票の提出や秘書による出席確認まである程の厳しさでした。期間の最初に受講者の3分の1に全講義の講義内容についての評価表が渡され受講生側から講義の評価も行いました。

講義は総論、人間工学、産業中毒、健康増進、職業関連疾患、労働衛生行政、健康管理、疫学、産業保健活動、作業管理、メンタルヘルス、情報管理など多岐に及び、半数の講義に試験も課されました。特に疫学は厳しく、今年は25%の受講生が不合格になったようです。ちなみに本講座の修了書もらえるのは、例年7割程度です。興味深い講義も多く、総論の大久保利晃先生の講義は総括的で感慨深く、産業保健活動の東敏昭先生の講義は企業の組織論が実際的でためになり、人間工学の山田琢之先生の講義は大変面白く好評でありましたが、堀江正知先生の倫理の講義で産業医の難しさを痛感しました。

実習も内容が充実していました。作業管理、作業環境管理、疫学、健康管理、メンタルヘルス、健康増進等の実習がありました。作業管理では、産業疲労を捉えるために、コンペアー作業やVDT作業の後で疲労度の計測をし、さらに現場での作業管理を行うために、煉瓦工場を職場巡視し、そこで人間工学チェックリストを用いて改善案を検討し発表しました。作業環境管理は、産業生態科学研究所の所長である田中勇武先生の指導で、労働衛生保護具、騒音測定と評価(A,B測定)および騒音対策、局所排気装置の性能試験がありました。田中先生の大きな声と矢継ぎ早の質問で多くの受講生はたじたじでした。疫学の実習はWINDOWS95を使っただけのデータ解析です。この実習のメインは、インターネットです。それを使って様々な有害物質や、原因不明の疫病に対する疫学調査からのデータをもとにレポートを作成し、グループ討論を行うという具合です。健康管理の実習は救急医療(一次救急)、じん肺、振動障害、健康診断結果の判読及び事後措置のシミュレーションを行いました。年々重要になるメンタルヘルスですが、自律訓練法や筋弛緩法を中心に、質問用紙のストレス評価がリラクゼーションの前後でどのように変わるかをみました。個人的な事ですが、20年前より自律訓練法を手がけたことがあったため、筋弛緩法の方が習得に時間はあまりかからず簡便であると感じました。また積極的傾聴法の実習も行いました。健康増進についてはTHP(Total Health Promotion Plan)に

関する健康測定を行い、自分の健康状態を認識し、また $\dot{V}O_2max/wt$ を測定した結果、自分の運動不足を思い知らされました。

2カ月半という長い期間ではありましたが、充実した講義内容と多くのことを習得でき、満足しております。

## 三重産業医会

中尾 一吉 (松下電工 津)



本会は、30年余りにわたり産業衛生にかかわる諸先輩の先生方により研鑽と適宜、適切な話題をとりあげ運営されて来た。参加者は、産業医のほか産業衛生看護職、事業体の衛生管理担当者も含め和気あいあいと進められて来た。この間大学研究者、行政官の参加も願うご助言、ご指導を頂いてきました。

平成9年度の三重産業医会の活動について事業内容をご紹介します。特別講演

日時：平成9年4月25日(金)

内容：「作業現場における整形外科的外傷及び障害」  
(予防及び救急処置について)

座長 三重大学名誉教授 坂本 弘  
講師 鈴鹿回生総合病院院長 藤澤 幸三

研究会第1回(三重県産業医研修連絡協議会と共催)

日時：平成9年6月19日(木)

内容：「有機溶剤の尿中代謝産物排泄量の評価」

座長 前三重大学教授 滝川 寛  
(1)ビデオ(有機溶剤の衛生管理)

(2)有機溶剤の尿中代謝産物排泄量の実際、健康診断から  
本田技研工業鈴鹿健康管理センター所長

山下 勝也

(3)有機溶剤の尿中代謝産物排泄量の評価  
三重大学医学部公衆衛生学教室教授

山内 徹

研究会第2回(三重県産業医研修連絡協議会と共催)

日時：平成9年8月21日(木)

内容：「聴力保護のための騒音職場管理」

座長 三重大学名誉教授 坂本 弘  
(1)dB(A)値と等価騒音レベル

三重大学医学部衛生学講師 村田真理子  
(2)職場騒音の測定結果に基づく環境管理区分

近畿健康管理センター 村田 和宏  
(3)聴力保護のための措置

前三重大学教授 滝川 寛

産業看護部会第1回

日時：平成9年8月28日(木)

内容：「胃疾患とヘリコバクター・ピロリ菌」

四日市築港病院院長 秋山 俊夫

研究会第3回(三重県産業医研修連絡協議会と共催)

日時：平成9年9月18日(木)

内容：「脳、心発作のリスクファクターと健康管理」

座長 三重県医師会副会長 児玉武伊知  
シンポジスト

「脳、心発作とその病態」

三重県立総合医療センター副院長 小西 得司

「脳、心発作と労働負荷との関係について」

三重大学名誉教授 坂本 弘

#### 研究会第4回

日時：平成9年12月9日(火)

内容：「最近の労働衛生行政について」

座長 三重大学名誉教授 坂本 弘

(1)「最近の労働衛生行政の動向」

三重県労基局安全衛生課長 高村 仁

(2)「最近の労災補償行政の動向」

三重県労基局労災補償課長 改田 良秋

#### 研究会第5回（三重県産業医研修連絡協議会と共催）

日時：平成10年1月11日(日)

内容：「産業保健チームの組織化—THPを例として—」

座長 三重大学名誉教授 坂本 弘

(1)産業医（健康測定医）の立場から

東芝四日市工場産業医 大久保浩司

(2)ヘルス・ケア・トレーナー

（ヘルス・ケア・リーダー）の立場から

中部電力三重人事課医務係長 寺嶋 永子

(3)産業保健指導者の立場から

東芝三重工場健康管理室 中川 祐子

(4)心理相談員・カウンセラーの立場から

三菱化成四日市健康管理センター

黒川 新子

#### 産業看護部会第2回

日時：平成10年2月6日(金)

内容：「最近の肺結核」

講師 国立療養所静澄病院副院長 坂井 隆

等々の効率化を進め、それによって得られた時間をできるだけ指導や相談に充てる様にしました。そんなところから従業員との信頼関係の樹立が自然にはかれた様に思います。今までにも種々の相談があり、身体的だけでなく、全人的に支援する必要があると教えられた学生の頃の教訓がよみがえる思いでした。早くからメンタルヘルスを含めたトータルヘルスケアを主張していたものの少数の医療スタッフの言う意見がすぐ実行に移せるとは限りません。ところがメンタル的に問題を持ったケースが続いたためメンタルヘルスがクローズアップされる結果となりました。この機会に

1. メンタルヘルス講演会の実施
2. 小冊子の作成・配布
3. 管理監督者を対象にしたリスナー教育の実施
4. 全従業員対象の質問紙によるチェック
5. 全従業員対象の自律訓練法の実施

等々を行い、今では講演会の実施、各階層別のメンタルヘルスに関する教育、管理監督者のリスナー教育の実施等の継続につながっています。

中でも管理監督者に対するリスナー教育は、全社展開の要望が受け入れられ、平成7年から全社的に実施し、すでに1500名程の管理者が受講しています。他にも、健康づくり教室の開催等を通して従業員に運動の実施と継続の働きかけを行っています。

企業で健康管理を進める最も重要なことは、企業のトップ、工場の管理監督者に、健康管理に関する十分な理解を深めてもらうことだと思います。そのためには今、従業員にとって何が必要で、どんな方法をとれば効果が期待できるのか、統計資料等の客観的な指標を用いながらタイムリーな情報の提供が大切でしょう。そのためにも保健婦としての自分自身の資質向上にこれからも取り組んでいきたいと思っています。

## 産業看護教育に携わるにあたって

荒木田 美香子（浜松医大・医・看護学科）

4月より地域看護学講座で産業看護を担当しています。これまで活動の拠点は東京でしたので、現在浜松市について一生懸命勉強中です。赴任早々、学生の見学・実習（産業保健現場）、さらに卒業予定者の就職等のお願いで多くの方にご相談し、皆様に温かいご協力をいただきまして非常に心強く感じる

と共に、深く感謝しております。

私はこれまで産業看護一筋というわけではなく、産業看護（東京都管工業健保とソニー本社）と学校保健（養護教諭）を行ったり来たり、また大学院修士課程で途中下車をしたりと落ち着いた実践をしてきています。確かに多くの事を経験する事ができましたが、実績の継続性のなさをつくづくと感じています。

出身校の聖路加看護大学では、臨床看護の学習が中心で、産業看護・保健に関する教育課程は無に等しかったと記憶しています。（そのころは企業の見学さえもなかったと思います）現場に出て、自らのあまりの無知さかげんにあきれながら、先輩に追いつこうとがんばったフレッシュマン時代でした。ソニー本社健康開発センター（開発という言葉が好きでした）では看護職のまとめ役をしつつ、社員一人一人との面接を基本にした健康管理・健康づくり活動・歯

## シリーズ 産業衛生に携わって

### 産業看護に携わって

西谷 直子（東レ 愛知工場）



以前から関心のあった産業現場の健康管理に携わってすでに13年目に入ろうとしています。当初は、健康診断が検査ごとに分割され、1年中何かの検査を行っている状態でした。その分同じ従業員に何回も顔を合わせる機会ができ、顔と名前を覚えるには好都合でした。しかし、従業員にしてみれば時間的にも、身

体的にも負担が増すことになります。事後指導も効率が悪く、データの揃うのを待っていたのでは、時間がかかりすぎてしまいます。そこで、必要な検査を一度にしかも短時間で済む様、改善に取りかかりました。まず、

1. 外部検査機関のスタッフの活用
2. 健康診断を春、秋にまとめる
3. 人間ドックの時期を健康診断に合わせて春に集中させる

科健診・管理職を対象としたメンタルヘルス教育など楽しく仕事をさせていただきました。細々とした面倒な事もありましたが、社員にとって良い事は実施していこうという自由な雰囲気を作り出してくれた産業医や企業の常識をイロハから教えてくれた事務長に感謝しています。労働衛生コンサルタントという資格があるのを知り、その取得を目指して学習を始めたのもこの頃でした。学習をしていていつも感じる事は、いかに自分はものを知らない人間であるかという事でした。1年目は学科に合格しましたが、面接で不合格、2年目でやっと合格させていただきました。(自分の感触では1年目のほうが良くできたような気が……)

教育現場に移り、産業看護をほとんどなにも知らない真っさらな状態の学生に教える事は怖い事でもあります。産業看護に夢を感じてもらえるような授業を作り上げたいという希望を持っています。看護教育において、産業看護は以前より、(私が学生だったころよりは)重きを置かれていますが、浜松医科大学のように専任の教官を置いているところは多くありません。そういった意味からも、今自分に課された責任の大きさを日々感じています。

今後、やってみたい事は数多くあるのですが、学校保健教育における労働保健のあり方や小規模事業所の健康管理向上などに関わっていきたくと考えています。ご指導をお願いいたします。

## 産業衛生に携わって

藤田 節也 (三菱電機 中津川)



平成8年4月より当製作所の専属産業医としてお世話になっております。診療を担当するようになりましてから現在までに約2年半経過しましたので、この間の診療所内の変化や、また私自身の考えを申し上げたいと思います。

まず、診療所内の健診システムについてですが、平成8年度より腹部超音波検査とDXA法による骨密度検査が導入されました。さらに、平成9年度より健康管理の新システム化が計られました。これにより一層、健康診断の信頼性が高められ、尚かつ検査結果通知のスピードアップにつながりました。ただ、検査項目の増加により健診時間が長くなったことと、診療所内のスタッフが新システムに慣れるまでの期間が思ったよりかかり、その間、診療と事務処理に追われ大変、忙しく毎日を過ごしました。これについては今後の検討課題としていきたいと考えております。

次に私が日頃、診療を行う上で感じたことを申し上げます。このように診療面では新しい検査やシステムが導入され日々、成果を上げつつありますが、やはり病気と向き合う患者の考え方をコントロールするところまでは至っておりません。スタッフと共に私も微力ながら生活指導を行っておりますが、例えば、薬さえ服用していれば、生活態度は二の次といった考えの患者が思いのほか多く、驚いております。粘り強く指導していく所存ですが先輩諸氏の中でどなたか良い指導方をご存じの方に御教示を賜われれば幸いに存じます。

最後に中津川の地域医療についてですが、人口に対しての医師数と医療機関が少なく混雑していることが多いため、他院への紹介が難しい場合があり、また逆に他院において治療中にもかかわらず、混雑していることを理由に当診療所で同じ治療、投薬を求める社員が数多く見受けられます。このため、社員にはどうしても当診療所

において診察、治療を行うケースが多くなります。この点で病診連携、診診連携がスムーズに運ばれることが、社員の健康管理を向上させるための、今後の検討課題として考えられます。

私自身、専属の産業医という仕事自体が初めての経験であるため、今までは無我夢中で日々を過ごして参りましたが、中津川という土地にも少しずつ慣れてきましたので、これからは風土や気質に応じた社員のための健康管理を行えばと、考えております。これからも学会員の先輩諸氏に御指導、御鞭撻を賜わりたく存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 話 題

### 「環境ホルモン」と身近な化学物質について

土山 ふみ (名古屋市環境科学研究所)



「発ガン」を起こす濃度よりもっと低い濃度で生殖機能を阻害する化学物質「外因性内分泌攪乱化学物質=環境ホルモン」が、極微量で未来を脅かす物質として、問題となっている。たとえば船底に貝や海藻などが付着するのを防ぐために使われた船底塗料TBT(トリブチルスズ)やTPT(トリフェニルスズ)

が海水中に1ppt( $10^{-13}$ )存在すると、巻き貝のイボニシの雌に雄の生殖器が発生したり雌の輸卵管が閉じて産卵不能になるという。

今私たちの身近な生活には、環境ホルモンであるかどうかは別として、実に沢山の化学物質があふれている。スーパーの食品売場では、発泡スチロールのトレイに載った食品が塩化ビニリデンのラップに包まれ、ペットボトル入りのミネラルウォーターが並んでいる。サンタリー用品売場ではシャンプー、リンス、衣料用・住居用合成洗剤、漂白剤、芳香剤が、日用品売場では、ピレスロイド(有機リン)等の家庭用防虫剤とp-ジクロロベンゼンなどの衣料用防虫剤が、そして衣料品売場では抗菌・防臭加工したものが年々増えている。これらの多種・大量の化学物質の使用実態は未だ明らかでないものが多いため、環境にどの程度放出され、どのような影響を与えているかについてはほとんど明らかにされていない。しかし、軽く・壊れず・便利と言われたカップ麺容器から溶出するスチレンの2及び3量体やポリカーボネート容器から溶出するビスフェノールAが今環境ホルモンとして疑われているように、今後どの化合物があらたに問題とされるかは、わからない状況がある。

家庭用「抗菌・防臭」剤に限っていえば、60-70年代によく使われたのは、上記のTBTとTPTであったが、79年にその強い毒性のため家庭用品への使用が禁止された。80年代に使われたのは殺菌剤イサルガンDP-300等であった。イサルガンDP-300は、塩素漂白剤で塩素化したものが日光にあたるとダイオキシンが生じることから繊維製品向けの販売が87年に中止された。現在、抗菌ブームは、下火になるどころか清潔志向を背景に使用は急増し、靴下・靴・下着・シーツばかりでなく、プラスチック製品、紙製品(壁紙、段ボール箱)、まないた、掃除機用バックフィルター、学童の鉛筆までに広まっている。これらの化学物質は、便利さと快適さを求めるなかで

生まれたものだが、その中で本当に必要なものは何なのか、便利さと快適さの引き替えに増す危険性はどれだけあるのかを知り、未来への責任を負った選択をすることが求められている。しかし、そのために必要な化学物質の情報は少ない。'98年5月、環境庁が「環境ホルモン」の疑いがあると発表した化学物質は67種であるが、今後さらに増えることが予想される。これらの物質についての様々な面からの調査研究が緊急であることは無論だが、「できるだけ使わない」シンプルな暮らしへと生活様式を見直すことが今求められている。

## 学会・研究会

### 静岡県産業保健研修会（産業看護分科会）

朝比奈 裕美（住友デュレズ）

西部地区研修会が6月12日(金)午後、浜松市アクティビティ内で開催されました。静岡県内の産業保健に携わる方が約60名参加されました。研修内容は(株)静岡県産業環境センターの土屋氏から「作業環境管理について」と題して、作業環境測定者の立場から作業環境チェックのポイントと局所排気装置の有効利用について話され着地点の木目細かな理論性に感心しました。浜松労働基準監督署安全衛生課長の犬野氏から「労働衛生行政について私たちが知っておきたいこと知らなければならぬこと」と題して、労働安全衛生法関係法令を手にして仕事をする必要がある事、また地域の産業保健センターの活用について話されました。2題とも労働者の健康を守る立場として重要なお話でした。質疑応答では法改正にともなう産業看護職の位置づけについて、各種健康診断・塵肺・作業環境の見方など活発に出されました。

### 第5回汎太平洋産業

#### 人間工学会（PPCOE）に参加して

小川 齊（愛知医大産業保健科学センター）

去る7月21日～23日に産業医科大学神代雅晴教授を大会長として北九州市においてPPCOEが開催されました。産業人間工学という名前は非常に馴染みがうすいのではとおもいますが実は、たとえばVDT作業の際にディスプレイが目線よりも上にあると疲れやすい、とか荷物の持ち上げかたを工夫したら腰痛がおこらなくなった、といった非常に身近な事柄も産業人間工学に含まれます。今回の学会においても非常に興味ある演題が数多くみられました。しかしタイや韓国からの参加が直前になって中止になったそうで、東南アジアにおける不況のきびしさをあらためて思い知らされました。

関連する国内学会として第3回産業保健人間工学会が、本年12月18、19日に京都において開催され（問い合わせ先0743-63-6172）、来年11月には当大学産業保健科学センター山田琢之助教授を大会長に第4回会議が開催予定です。この分野は非常に歴史が浅く、今後より多くの研究者の参加を希望します。

## 第71回日本産業衛生学会

井波 修（藤田保衛大・医・公衛）

第71回日本産業衛生学会は角田文男教授（岩手医大・医・衛生公衛）を学会長として平成10年4月22日～24日（特別研修会は4月25日）の期間、盛岡市で行われた。学会2日目は、島 正吾先生（日本産業衛生学会理事長）による「21世紀の産業衛生活動に期待されるもの」と横山栄二先生（前国立公衆衛生院院長）による「化学物質に関するリスク対応とその動向」の特別講演が行われ、共に興味深い講演であり、大変わかりやすく拝聴できた。私にとっては3回目の日本産業衛生学会総会の参加であり、懇親会などを通じて多くの先生方と少しづつではありますが話す機会もふえて、今までと違い、別の視点から考えられるようになった。学会期間中の盛岡市は大変暑い日々が続き、半袖姿の人を見かけるほどであった。学会中の昼食で食べたわんこそばが、今でも忘れられないほどおいしかった。

## 第38回全国産業健康管理研究会全国会議

木下 勝也（本田技研鈴鹿）

上記全国会議は、7月3日東京都千代田区の星陵会館において開催された。午前中は『海外赴任者の健康管理』のアンケート集計報告に続き松山幸雄共立女子大学教授の講演『国際化の意味するもの』があり、ジャーナリストとして長年の海外生活の経験から日本の国際化の必要性とその進め方を具体的なエピソードに独自のユーモアを混じえてわかり易く話された。次に事業報告と恒例のアンケート集計報告があった。午後は竹内勤慶応大学教授の講演『国際感染症の現況』があり、海外の感染症の現況とそれに注意を払うことの必要性について述べられた。最後にパネルディスカッション『海外赴任者の健康管理』があり、海外赴任経験者の指定発言者2名、各地区推薦のパネリスト4名、大使館医務官経験者のコメンテーター1名により海外赴任に共なる様々な健康に関連する問題について活発な討議がなされた。さらにフロアからも質疑や追加発言があり盛況のうちに閉会した。

## 第1回日本地域看護学会

白石 知子（愛知県立看護大）

地域看護は公衆衛生（行政）看護、在宅看護、産業看護、学校保健を包含したものとして、昨年秋に学会が設立され、初の学術集会が平成10年6月20日、東京大学教養部に開催されました。今回のメインテーマは「地域看護学のストラテジー」。演題は、地域連携、教育・実習などを含んだ84題。このうち産業看護は4題（産業看護職と地域保健婦の連携、産業看護職の役割認識、中年女性労働者の健康と生活習慣）でした。シンポジウムでは、4領域からのシンポジストによって、「実践活動の向上と体系化を促す地域看護学研究のあり方」についての議論がなされました。中でも、研究機関が関与しながら、できるだけ多くのものをマニュアル化すること、また、マニュアル化できない地域看護マインド（保健婦魂とも）を伝えていくことの必要性など、現場と研究機関との役割分担や人材育成に

ついでの話は、産業の分野においても重要な視点であると、興味深く拝聴しました。

これからの諸行事予定

平成10年度日本産業衛生学会東海地方会学会

- 期 日：平成10年11月6日(金)午後9時30分より午後5時
(午前：一般演題、午後：特別講演、シンポジウム)
場 所：あざれあ(〒422-8063 静岡市馬淵1丁目17-1)
特別講演「免疫から見た生体侵襲の分子的機序」
演者：東京大学医学部衛生学教授 松島綱治
座長：竹内宏一
シンポジウム「ライフスタイルと免疫機能との関連性」
司会：吉田 勉、祐田泰延
生活習慣と免疫 大阪大学医学部環境医学教授 森本兼義
製茶業従事者の呼吸器疾患に対する免疫学的アプローチ
富士宮市民病院内科科長 白井敏博
喘息とPAF 帝京大学薬学部衛生化学教授 和久敬蔵
最近の免疫毒性評価法と問題点
資生堂安全性分析センター 参事 畑尾正人
第43回 職場精神衛生研究会
日時：平成10年11月20日(金) 14:00~16:00
場所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
講演：「アルコールに関わる問題について」(仮)
講師：小寺明美(アルク健康相談室長)
第44回 職場精神衛生研究会
日時：平成11年2月12日(金) 14:00~16:00
場所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
講演：「働く女性のメンタルヘルス」(仮)
講師：巽あさみ(藤田保健衛生大学衛生学部)

会員の異動

- 入会 愛知 堀 浩(中部労災病院)、齊藤政彦(大同特殊鋼星崎)、松本享之(医師)、水谷聖子(日赤愛知短大)、足立幸子(東海銀行)、三宅忍幸(トヨタ自動車)、佐久間温巳(マキタ)、斎尾武郎(千秋病院)、伊藤健吾(国療中部病院院長寿研)、加藤忠之(豊田合成井之口)、加藤幸正(NTT東海病院)、王海蘭(名大医衛生)、鈴木正康(アイシン・エイ・ダブリュ精密)、古村敏大(名市大医公衛)、貴田純一(JR東海総合病院)、森 昭友(JR東海総合病院)、夏田洋幹(日本生命)、竹内清美(愛知医大衛生)、塚田月美(松下精工春日井)、栗倉 眞(第一生命名古屋)三重 青田玲子(NTT東海三重)、石川 仁(三重大医公衛)、好井千鶴(キャノン上野)岐阜 国枝早智子(日本通運大垣)、太田英規(環境コンサルタント)静岡 杉山淑子(住友ベークライト静岡)、朝比奈裕美(住友デュレズ)、池上直美(清水駿府病院)、隅田 政(浜松労災病院)、河本正昭(浜松労災病院)他府県 久保とし子(渡辺病院・大阪)
退会 愛知 土持鋭子(八神製作所)、大村政治、前田典子(八神製作所)、松葉典子(八神製作所)、水野綾子(八神製作所)以上平成9年度追加分、戸田 孝(三井化学名古屋)、水谷 進(デンソー高棚)、小林 肇(東海ゴム)、立川賀代(愛知県信金健保)、高木健三(名大医二内)、早川清子(三井化学名古屋)、稲垣紀子(名古屋水道局)三重 光永一郎(東洋紡績三重)岐阜 高瀬頼宏(三菱電機中津川)、広瀬玲子(岐阜県産業保健センター)、入沢 猛(岐阜県産業保健センター)、若尾克美(岐阜県産業保健センター)

静岡 佐藤文恵(八幡製作所)以上平成9年度追加分、齊藤とし江(矢崎部品大浜)

- 転入 愛知 平松通徳(松下電器・近畿地方会より)三重 松島 康(医師・関東地方会より)静岡 北 倫子(NTT静岡・関東地方会より)

地方会理事会

平成10年度第1回理事会

日 時：平成10年5月12日(水)14:00~
場 所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
出席者：29名 委任状：45名

- 1. 報告事項
(1)事務局からの連絡事項(柴田) (2)本部からの連絡事項(竹内) (3)地方会関連学会・研究会 (4)愛知県医師会・産業医公会幹事推薦(竹内) (5)法制度検討委員会委員推薦(竹内) (6)三重県産業医会会長人事(橋本)
2. 協議事項
(1)地方会ニュース43号(吉田) (2)平成9年度東海地方会誌(竹内) (3)平成10年度東海地方会総会・研修会(岩井) (4)平成10年度東海地方会学会(清水) (5)地方会関連学会・研究会 (6)役員改選(竹内)

平成10年度第2回理事会

日 時：平成10年7月12日(水)14:00~
場 所：名古屋大学医学部鶴友会館2F大会議室
出席者：27名 委任状：44名

- 1. 報告事項
(1)事務局からの報告事項(柴田) (2)関連学会・研究会
2. 協議事項
(1)地方会ニュース44号(吉田) (2)平成10年度東海地方会学会(祐田) (3)平成10年度東海地方会総会ならびに研修会(柴田) (4)地方会関連学会・研究会 (5)役員改選(竹内) (6)日医認定産業医研修会共催(島)

編集後記

地方会ニュースの編集委員会は、毎月2回開かれる。ニュースは毎年3号発行されることになっているので、委員会は年6回開催されることになる。ようやく脱稿できてホッとしていると、次号の編集がすぐ始まる。吉田委員長、谷脇事務局長のご苦勞は並大抵なものではない。私は一委員にすぎないので、それ程ではないが、それでも2か月に1回は招集をかけられる。しかし私は委員会に出席するのを楽しみにしている。その時々新しい問題を議論するので、自分の勉強になることは勿論であるが、記事にならないホットな裏情報が聴けるのも興し。要するに皆でワイワイやって楽しんでいるのである。今年は役員改選の年、編集委員に指名された先生は是非参加されるようお勧めしたい。(五藤 雅博)

次回発行 平成11年1月1日

編集責任者 吉田 勉(藤田保衛大)

編集委員(五十音順)

- 井谷 徹(名市大) 市原 学(名大)
岩井 淳(全日本労働福祉協会) 大久保浩司(東芝四日市)
加藤 保夫(岐阜県産業保健センター) 鎌田 隆(本田技研浜松)
後藤 猛(労働衛生コンサルタント) 五藤 雅博(旭労災病院)
榊原 久孝(名大) 高柳 泰世(本郷眼科)
巽 あさみ(藤田保衛大) 谷脇 弘茂(藤田保衛大)
松本 忠雄(刈谷保健所) 山田 琢之(愛知医大)